

Costume and Textile

No.17

服飾文化学会会報

2009年3月

2009（平成21）年度 第10回総会・大会のお知らせ

会員の皆様には既にお知らせを発送致しましたが、2009（平成21）年度第10回総会・大会を下記のように開催致します。皆様には奮って御参加くださいますよう御案内申し上げます。

開催日 2009年5月23日（土）・24日（日）

開催校 奈良女子大学

〒630-8506 奈良市北魚屋西町

（近鉄「奈良」駅より徒歩約7分）

【研究発表】文学部北棟201・202室

【見学会】①奈良女子大学記念館（重文）

及び創立百周年記念展示

②奈良県立美術館特別展

《プログラム》

5月23日（土）

13：30～15：30 研究発表

15：50～17：10 特別講演

演題「一領の紅布衫をめぐる」

講師：田中 陽子氏（宮内庁正倉院事務所

保存課整理室 内閣府技官）

◆講師プロフィール

田中陽子氏は日本女子大学大学院 博士後期課程で学ばれた後、正倉院に伝世する服飾品や染織品宝物を中心に、調査研究・保存管理に携わっている若手研究者です。

正倉院宝物に関する主な執筆に『正倉院宝物に学ぶ』思文閣出版2008、『別冊太陽 正倉院の世界』平凡社2006、『正倉院展』図録解説 奈良

国立博物館編、『皇后陛下のご養蚕と正倉院裂の復元』図録解説 宮内庁三の丸尚蔵館編2005などがあり、『正倉院紀要』宮内庁正倉院事務所編にも多くの研究成果を発表されています。

17：20～17：50 総会

18：00～19：30 懇親会（百楽・中華料理）

5月24日（日）

9：30～11：30 研究発表、展示発表ショートスピーチ

13：00～15：00 見学会

①奈良女子大学記念館及び百周年記念展示

②奈良県立美術館へ移動（徒歩約5分）

特別展「託す想い・伝える心 人形展」

◎アクセス

近鉄「奈良」駅までは

・京都から特急で約35分（近鉄線）

・大阪梅田より約60分（JR環状線「鶴橋」駅で近鉄線に乗り換え）

◎参加費用

大会参加費：会	員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円

懇親会参加費：4,000円

昼食代（5/24）：1,000円

（見学会の費用は未定）

◎周辺のホテル

(早めに各自でお申込み下さい)

「ホテル日航奈良」	0742-35-8831
「奈良ホテル」	0742-26-3300
「ホテルフジタ奈良」	0742-23-8111
「花小路 (はなこみち)」	0742-26-2646
「ホテルアジュール・奈良」	0742-22-2577
「奈良ワシントンホテルプラザ」	0742-27-0410
「国際奈良学セミナーハウス」	0742-23-5821
「共済会館大和」	0742-24-5021
「春日野荘」	0742-22-6021

◎お問合せ先

第10回総会・大会実行委員会

実行委員長 岩崎雅美

奈良女子大学生活環境学部

〒630-8506

奈良市北魚屋西町

Tel&Fax : 0742-20-3495

E-mail : miwasaki@cc.nar-wu.ac.jp

◎講演要旨

「一領の紅布衫をめぐって」田中陽子氏

正倉院に、紅色に染められた単仕立ての衫がある。衫とは袍などの内に着る肌着であるが、時には1枚で上着として着ることもあった。

今回、紹介する衫は、1枚の麻布を肩で後ろに折り返して、襟を丸く抜き、胸の部分は裾まで割け目を入れて左右に身頃を分けたもの。裾の両脇は下から40cmほど縫い合わされておらず、開放的である。このような現在の形状に加えて、細部の縫い目などを観察すると、袖や身頃には他の裂と縫い合わせていた痕跡なども観察できることから、元は袖や裾などがついていただ可能性もある。また背面の裾には小さく「刑部小君」と墨書が記されている。小君は男性の名称にみられるもので、この衫を着ていた人物の名前であろう。その約20cm下方に「天平十三年十月」との記載が新たに発見された。

10月は近国における調庸物の納入期限であって

「天平…年十月」と記された調庸銘は多い。以上を勘案するならば、この記載も調庸銘である可能性が高い。その場合、「刑部小君」は調庸貢進者もしくは専当国司または郡司と推測できる。

次に縫製の視点からみると、この衫の生地は、右身頃に織物の片方の耳がある57cm幅の麻布である。奈良時代の麻布は1幅が70cm前後であることから推測すると、織物の左端を10数cm裁ち落として使用されたと考える。他の麻布製衣服の縫製例からみて、このように麻布の幅を狭く裁って使用する場合は、子供用であることが多い。

最後に赤く染色された染料について、蛍光分光分析および紫外可視分光分析の結果、55日間日光暴露した紅花染苧麻布とほぼ一致することが明らかとなった。

以上からこの紅布衫は、調庸貢進者もしくは専当国司または郡司である刑部小君から天平十三年十月に納められた麻布を使用し、この麻布を紅花で美しく染色して、子供用の衫として仕立てたものである可能性が高いと考える。

◎ 見学

「奈良女子大学記念館及創立百周年記念展示」

「奈良県立美術館 特別展」

奈良女子大学は前身の奈良女子高等師範学校創立(1909)から数えて本年百周年を迎えます。それを記念する行事の中に記念館(重文)の展示や近隣の奈良県立美術館での特別展があります。

記念館では主に大学の歴史を紹介致します。また特別展「託す想い・伝える心 人形展～(社)佐保会所蔵品を中心に～」では、昭和初期に全国同窓会(佐保会)支部や会員から寄贈された人形約200組、総数680点の中から選ばれた人形が展示されます。この中には戦災で現存する数が少ない沖縄人形や、当時の中国・台湾・朝鮮半島の人形も含まれています。人形の特徴ある表現・表情をお楽しみ下さい。

夜着と吉祥模様 ―夏期セミナー余話―

福山 和子

北海道伊達市開拓記念館に「北のもの」とか「おひえ」といわれる江戸時代末期の「夜着」という服飾資料がある。

「夜着」というのは夜具の一種である。形状は「搔卷」の前身にあたり、振りのない広袖の長着の表地と裏地の間に厚く綿をいれて仕立てたものをいう。古くは、寝るときには昼間着ていた衣服を脱いでこれを夜着として掛けていたが次第に厚く綿をいれ一般の長着よりふたまわりほど大きく仕立てて寝るときに掛け布団のように体にかけたものである。

収蔵されている夜着を喜多川守貞の「守貞謄稿」の文章に照らしてみると資料の夜着は江戸時代のものに良く似ている。丈は収蔵資料によるが凡そ210cm前後、幅は180cm前後ある。更に真綿と木綿綿が厚く入っている。袖口には約15cm、裾には約40cmの裏布から続いた幅の広い袴がつき(鏡仕立ての様)、緒付きのとじがしてある。

この夜着の特徴は模様にある。そのいずれも背面にあたる表布に吉祥模様が染と刺繍で施されていることである。

伊達家当主用だったとされる所蔵の4枚の図柄は、1枚目は吉祥の象徴としての動物である鶴と災難を幸いに転ずるという「鶴と南天」の組み合わせた模様、2枚目は中国ではめでたい鳥とされた鳳凰とそれが棲むとされる桐を組み合わせた「鳳凰と桐」の模様、3枚目は富貴の象徴である牡丹と瑞鳥である孔雀を意匠化した「孔雀と牡丹」模様、最後は富や福に恵まれることを願って吉祥とされる持ち物や道具である丁子・打出の小槌・巾着などが描かれた「宝尽くし」の模様である。

何故、夜着にこのような吉祥模様を入れることにこだわったのだろうか。明治維新後移住に際して特別に作る時間的余裕はなかったと推察すると上級武士たちは常にこのようなものを用意していたか、日常的に用いていたと考えられる。

だとすれば、なぜ、このような吉祥模様が描かれたものを掛けて寝たのだろうか。長崎巖教授によると、眠っている間に魔物にとりつかれないために、マジカルな力を持った吉祥模様で己が体をつつむようになった、とある。

夏期セミナーで津田命子氏の講演にあった模様を付ける意味と技法のなかで、アイヌ民族は衣服の袖口や裾や襟、背中に模様を入れるのはそこから魔物が入らないように結界をつくることであると説明があったのを思い出す。

衣服につけた模様によって外敵や魔物などから守られるという念いはアイヌ民族の結界の信仰に通じる思想があったのではないだろうか。

北海道というとその代名詞のようにアイヌ民族やニブヒなどの北方民族について語られる。しかし、その歴史は縄文時代にまでさかのぼる。よく知られているところでは、江戸幕府の統治や明治政府が開拓使を設置してからのことであり、北辺の守りや開拓のために士族をはじめ全国から農民、漁民、商人たちが入植してからのことになる。

冒頭に記した伊達市は伊達家支藩の藩主と家臣団が北辺の警備と開拓のために入植した地である。その際に持ち込んだ服飾の一部が開拓期の資料とともに遺されており、「小袖雛形模様写」「提げ帯」「熨斗目」等々は江戸時代末期の武家の服飾美を彷彿とさせる。開拓の厳しさにもかかわらず、出身母体の士族の証として代々大切に保存してきたことに凄烈な入植の意志が伝わってくる。

明治時代初頭、異国の地のような北国での生活はこれらの夜着に包まれている時だけが心休まる時であったのかもしれない。しかし、持っていない人々はどうしたのかと思い巡らすのである。

参考資料

- ・長崎巖著『きものと裂のことば案内』小学館
- ・小川光巖著『寝所と寝具の歴史』雄山閣
- ・長崎巖監修『きもの文様図鑑』平凡社
- ・喜田川守貞著 宇佐美英機校訂『近世風俗志(守貞謄稿)』岩波書店

2008（平成20）年度論文発表会の報告



伊藤会長の挨拶

去る2008年2月28日（土曜日）午後1時30分より、東京家政大学120周年記念館3C教室において、論文発表会が開催された。伊藤紀之会長の挨拶に始まり、卒業論文5件、修士論文3件の発表がなされた。例年に比べて3割近く多い76名（会員32名、非会員44名）の参加者を迎えて、滞りなく行われた。

発表論文の概要は以下のとおりである。

卒業論文

1. 白色LED光源の博物館照明としての適性評価 —演色性—
共立女子大学 岡山恭子、川口恭美、松川久美子
2. 土方巽と舞踏の身体
杉野服飾大学 張山玲美
3. 自己愛傾向と外見関与度に関する一考察
文化女子大学 申喜彦
4. ムカサリ絵馬に描かれた婚礼衣装
文化女子大学 柴田知恵子
5. 大鎧の威毛 —軍記物語を中心に—
日本女子大学 澤本麻理恵

岡山・川口・松川論文は近年評価の高い白色LED光源に注目し、その博物館照明としての適用性、とりわけ演色性について、実験をもとに検討したもので、対象物によっては補完的方法を要

するものの、LED光源が蛍光ランプと演色性の上ではほぼ同等との興味深い結果が報告された。

張山論文は舞踏家土方巽を取り上げ、活動期ごとの表現法を追いながら、舞踏によって表現された彼の身体観を追究した成果が報告された。

申論文は自己愛が社会的に承認されるようになった現代社会において、その度合いと外見への関心との相互関係性をアンケート調査により探ろうとしたもので、自己愛傾向の高いグループを更に「過敏型」と「無関心型」に分類するなど、詳細な結果が報告された。

柴田論文は山形県奥羽山脈沿いの5市に残るムカサリ（婚礼）絵馬の史料価値に注目し、詳細な調査の結果、花婿の衣装が昭和初期に袴から羽織に移行した点などを指摘した。座長から文化財指定への働きかけをしては、とのご意見があった。

澤本論文は大鎧の全盛期とされる平安時代後期から鎌倉時代に用いられた大鎧の種類とその役割について、軍記物語、絵巻物、実物13種をもとに研究したもので、大鎧が実用面のみならず、精神的役割を担ったこと、着用者の身分、年齢、好みなどとも深く関わり、着用者の人物を象徴したことが述べられた。

修士論文

6. 近代における画家と染織業界の関係に関する研究
共立女子大学 許斐亮子
7. 雑誌からみる19世紀前半イギリスのファッション —The World of fashion and Continental Feuilleton を中心に—
日本女子大学 矢澤郁美
8. PRADA —プラダにおける芸術後援とその意味—
文化女子大学 山本真弓

許斐論文は明治以降の呉服業界と画家を同時に襲った低迷の中で始まった染織品の下絵師としての画家の登用以来の双方の係わり合いの歴史を、

主要染織業六社の社史を中心に調査したもので、とりわけ大正初期までの実り多い時期の成果について述べられた。

矢澤論文は19世紀女性ファッション史の中で、1824年から34年に焦点を当て、イギリスの月刊誌『*The World of Fashion and Continental Feuilleton*』のプレートを中心に調査しており、フランスの雑誌『*Journal des Dames et des Modes*』のプレートの転載、フランス語によるファッション用語の記載、人気のあった生地名としてのサテンやナプル、モスリン、色彩への関心などが見出され、当時の流行の変化への希求、フランスの影響力などが指摘された。

山本論文はラグジュアリー・ブランドにおける芸術後援のあり方と、それに伴うブランド・イメージの構築について、プラダを事例として研究しており、同社のデザイナー、ミウチャ・プラダにとっては前衛的芸術への後援が自身の芸術活動の意味をなし、またそれが企業にとっては前衛的という企業イメージ形成に有効に働いたことが報告された。

いずれの発表に対しても予定時間を越えるほどの活発で熱心な質疑応答がなされた。発表を通じて、大学間の垣根を超えた交流が生まれること、それぞれの研究の領域や視点が広がりを持つことが大いに期待される。また今回はファッションにおける心理的側面、ファッション産業における企業の戦略などに関する研究分野の発表が見られ、本学会の領域の広がりも期待される内容であった。

懇親会

東京家政大学緑窓会館にて、16時15分より開かれた。伊藤会長の司会で始まり、若い学生を交えての歓談とともに交流を深め合った。蔵方、小笠原両副会長のご挨拶を頂き、17時、盛会のうちに散会となった。出席者約60名。

(論文発表会担当 高部啓子・能澤慧子)



懇親会での
小笠原副会長



懇親会での蔵方副会長



懇親会場にて

2008（平成20）年度研究例会の報告

日時：2008年11月22日（土）13：00～15：10

会場：お茶の水女子大学（大学本館135室）

今年度は新進気鋭のお二方の研究者から、以下のような西洋服飾史に関する最新の研究成果をうかがいました。（研究例会担当理事）

18世紀後半フランスにおけるアングロマニーの服飾流

西浦麻美子（お茶の水女子大学非常勤）

「アングロマニー」とは、「イギリス心酔」、「イギリス崇拜」、「イギリスかぶれ」などと訳され、18世紀後半のフランスにおける、イギリスの風俗やファッションの流行を背景に誕生した言葉である。これまで、アングロマニーの服飾流行は、19世紀のブルジョワ・モードの前身となる簡素なモードをもたらしたことから、その簡素化がフランス革命によって引き起こされた身分の「平等化」と合致することから、とすると「デモクラシー」のモードとみなされてきた。ここでは、改めてその意味を問い直したい。

世紀前半に、イギリスの議会政治や宗教的寛容への礼賛から始まったアングロマニーは、七年戦争後の両国人の交流、メディアの発達などを背景に、哲学趣味、自然趣味という形をとって、簡素なイギリス服の流行をもたらした。

華やかな刺繍装飾を特徴とするフランス風の正装が「蝶」にたとえられたのに対して、元来乗馬のための実用服であったシンプルなイギリス風の略装は「毛虫」にたとえられ、大貴族の若者たちが街での自由を謳歌するための「お忍び服」として流行した。しかし一方で、色も装飾もない「御者のような格好」は、イギリスかぶれたちの乱暴な素行とあわせて、礼儀も威厳も欠く野蛮な衣服として非難された。

後に革命の首謀者と目されることになったシャルトル公、ルイ・フィリップ・ジョゼフは、イギリ



スから馬や馬具を輸入し、競馬を企画し、イギリス式庭園を造らせるなど、アングロマニーの流行を牽引した。彼の周りには、イギリスに傾倒し、王権に批判的な態度を表明する若者たちが集い、次第にヴェルサイユの宮廷に対立するパリのイギリスかぶれの勢力という構図ができあがった。

敵国のモードは、愛国者の目には、フランスを侵略する脅威と映った。また、平民の衣服を連想させるイギリス服は、貴族の衣裳としてふさわしくないことから、貴族の若者たちによって反抗精神を表すために利用された。フランス王権に対立するこうしたイメージに加えて、結果的に外見上の平等化をもたらしたことから、革命後の貴族の回想録では、アングロマニーの服飾流行に革命の予兆、平等への願い、民主主義的意味が指摘されることになった。

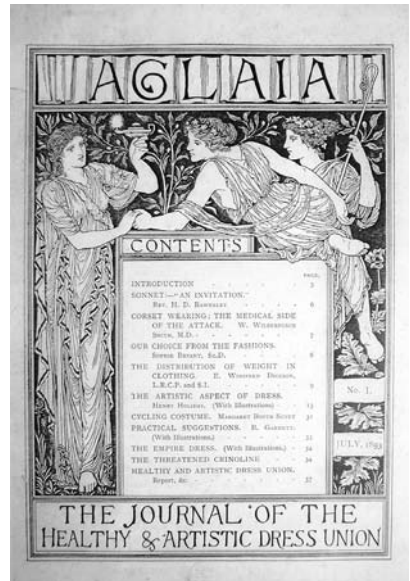
しかし実際、革命前夜の流行は、イギリス服の特徴である襟や鋼鉄製ボタンが強調され、派手な縞柄が採用されるなど、フランス風にアレンジされた形に変化しており、必ずしも簡素化の方向に向かってはいなかった（図）。国王に最も近い身分であることを示す聖霊勲章とイギリス服とを組み合わせて着用した例も見られることから、そこに「デモクラシー」の言葉を当てはめるのは適当ではない。それは、たとえ平民のように装っても血統により身分が保証されているという大貴族たちの余裕のもとに生まれた、エリート趣味の服飾流行であったといえる。

19世紀英国における「健康・芸術的衣服同盟」をめぐって

鈴木 桜子（杉野服飾大学）

19世紀イギリスで起こった改良服運動は、当初、アメリカからもたらされたブルーマー運動の傾向に近いものであった。それらは「合理服」という名称の下、合理服協会等、1880年代の一連の組織として次々と誕生していくことになった。その運動の中で1890年に設立された「健康・芸術的衣服同盟」は、それらとは異質な特徴を持っていた。「合理服」が衣服改革を推し進める背景にフェミニズムの問題があったこと、また、「合理」故に機能性を優先するあまり美的趣味に欠けたのに対し、「健康・芸術的衣服同盟」はコルセットによる人工美を否定し、自然に即した「芸術的衣服」を目指していったのである。その「同盟」では時代の芸術家・デザイナーたちが参加することによってある共通した衣服観の下、新しい衣服の提案が試みられていった。その理論的、具体的試みは、1893年に創刊された「同盟」の機関誌Aglaiaに文字とイラストで著された。

その衣服観とは、コルセットが装着される前の時代にあった古代・中世時代の衣服であった。歴史衣装をそのまま再現するのではなく、リフォームされた形で表わされた。芸術家・デザイナーたちは、その衣服観を以前から運動として活動をしていたラファエル前派の絵画表現の中に見出していったのである。D.G.ロセッティ、W.モリス、W.クレイン、ヘンリー・ホリデイ、バーン＝ジョーンズらは絵画のために衣服デザインをし、その時の衣服が後の「健康・芸術的衣服同盟」の衣服観に繋がっていったのだった。肩を支点として流れ落ちるドレープ豊かな衣服は、古典的な美しさと結び付けられ、ドレープ自体が身体のプロポーションを表し装飾的な要素も持ち合わせていた。そして彼らは衣服それ自体の新しい構造とデザインを提案するにとどまらず、流行現象によって衣服の美しさが破壊されている状況をも糾弾していったのである。



「健康・芸術的衣服同盟」で提案されていた衣服は、アーツ・アンド・クラフツ運動の理念と軌を一にするものであった。W.モリスによって作られたアーツ・アンド・クラフツ運動の論理的基盤は、中世の手工芸を理想とし、室内空間を装飾するあらゆるものの刷新を目指したものだ。その室内空間の中で時間を過ごす女性の衣服はまた、それらの調和の中にあるべきだと考えたのだった。事実「同盟」に参加したメンバーには、アーツ・アンド・クラフツ運動に参加したデザイナーが含まれている。

「健康・芸術的衣服同盟」の衣服は、エステティック・ドレスとの繋がりを見せ、パリ・モードに少なからず影響を与えたとも言われるが、同盟の活動自体はいたって教育的・啓蒙的なものであった。彼らの運動が古代・中世を拠り所としたのも懐古趣味としてではなかった。19世紀の社会問題の認識とその克服を過去を拠り所としながら前進・改革をしようとしたラファエル前派やアーツ・アンド・クラフツ運動の姿勢の下に、衣服の問題を見出し解決しようとしたのであった。

*****事務局から*****

●会費納入のお願い

今号に2009(平成21)年度 服飾文化学会会費(正会員6千円、学生会員3千円)の払込用紙を同封しました。5月末日迄にお振込み下さい。

過年度未納の方も、ご確認のうえお振込みをよろしくお願い致します。

●2009年度夏期セミナーのお知らせ

総会・大会時に、ご案内、申込用紙などを配布いたします。

日程：2009年8月5日(水)～7日(金)

予定：

第1日 石川県 輪島漆芸美術館見学、講演
懇親会

第2日 金沢市内
・金箔打ちの見学
・卯辰山工芸工房見学、講演
・花岡コレクションの見学
・フリータイム

第3日 金沢市内
・加賀友禅工房見学
・石川県立美術館 染織品の見学、解説
・午後は、時間まで市内見学

★入会者(2008年9月～)※敬称略・五十音順

正会員

佐々木 由美子	昭和学院短期大学
鈴木 美登里	神奈川県
高山 知子	日本学会会議事務局
松浦 啓子	はじめてきもの小梅
森本 一成	京都工芸繊維大学大学院
柳下 美和子	埼玉県

学生会員

朝比奈 瑶子	文化女子大学大学院
松崎 裕子	東京大学大学院
横山 芙美	文化女子大学大学院
李 政垠	東京藝術大学大学院

定期購読

全国大学生生活協同組合連合会図書サービス

★退会者

正会員

柳澤 元子	2008年9月25日
鷹司 綸子	2008年度末
中田 尚子	〃
本間 小枝子	〃

定期購読

琉球大学付属図書館

東京田中短期大学図書館

学会誌〈作品編〉お詫びと訂正

先日刊行になりました「服飾文化学会誌〈作品編〉」Vol.1におきまして誤植がありました。ここに訂正し深くお詫び申し上げます。

目次

(誤)論文→(正)作品

P.24

(誤)佐藤康子先生→(正)佐藤泰子先生
作品投稿規定(ix)

(誤)作品集→(正)作品編 6箇所

作品執筆要領(xii)

(誤)作品集→(正)作品編 2箇所

(学会誌・作品編 編集委員)

訃報

元理事、永野順子先生がご逝去になり2月19日にご葬儀が行なわれました。当学会発足時にはご尽力をいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(事務局)

会報 No.17：2009(平成21)年3月発行
編集発行人：服飾文化学会
事務局：101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1
共立女子大学 被服意匠研究室
TEL,FAX:03-3237-2496
E-mail:isho@s1.kyoritsu-wu.ac.jp
URL:http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp